コミュニティ政策学部における異文化教育の試み

成戸　浩嗣
（愛知学泉大学コミュニティ政策学部）

0. はじめに

2003年度から2007年度にかけて、コミュニテイ政策学部の「演習(2年次生対象)」、「専門演習(3年次生対象)」において「異文化理解」を目的としたゼミを担当した。本学部のメインの内容ではないが、学部の教育内容になるべく沿う形でテーマをひろい、検討の対象としたつもりである。

コミュニテイとは「人のつながり」を指すと言われる。かつてはほとんどの人々が村社会に暮らし、人々は自分の村あるいは町からあまり遠くに出かけなかった。例えば農業を営む人々にとっては、隣近所の人々をはじめとする他人と共同で農作業や各種の行事を行なうのが普通であった。しかし、都市化が進むにつれて住む所と働く所が別々となり、町や村という入れ物はあってもそこに住む人々相互のつながりはかつてに比べると希薄になってきている。現代社会において「コミュニテイ」の大切さがとなえられるのも、町・村とそこに住む人々とが必ずしもかつてのように一体ではない状況が下地になっていると考えられる。コミュニテイづくりは、異なる環境のもとで育ち、異なる組織で働く、相互に価値観の異なる人々の間でも必要とされる。このような場合に、自分の考え方や価値観を相手も有すると思い込んで行動するとうまくいかないことがしばしばである。農村に育った人と都市に育った人、企業人と官公庁に勤める人、男性と女性、高齢者と非高齢者、健常者と非健常者など、それぞれの人々は異なる目線、価値観、考え方によって物事を見たり判断したりしている。

成戸ゼミでは、担当者の専門が中国語ということもあり、考察の主たる対象を「日本人と外国人」とし、日本人が外国で、あるいは外国人が日本で、それぞれ常識や習慣の相違から戸惑いを覚えたり失敗したりするケースを取り上げ、「自分と相手とは違う考え方をもっており、違うことを知った上でつき合う必要がある」ことを学ぶ。外国人と交流する際には、「どうすれば誤解や摩擦を回避できるか」を考える以前に、「どういう状況で誤解や摩擦が起こるか」を知っておく必要がある。そして、個人のレベルでつき合う場合に問題となることは、必ず組織のレベルでも同様に問題となってくる。扱う内容は個別の小さな事例が多いが、それらの中には相手を理解するための様々なヒントが含まれている。本演習では、受講者が学んだことを「よりよいコミュニティづくり」のスキルとして生かせるようにとのねらいを込めて内容構成を行なっている。以下に、1セメスターで行なう順序に沿って紹介する。

本演習の各回のテーマとねらいは以下の通りである。①～⑧のように項目をたててはいるが、1セメスターは14回であり、一つの項目が複数回にまたがることもある。

① 異文化を学ぶことの面白さ・意義
——異文化を知ることは驚きの連続であることを知る。インパクトが強く興味深い例

を提示し、異文化に興味をもつきっかけとする。

② 外国語の面白さ・音の魅力
——外国語の音を聞いてその美しさを味わう。

③ 複数の国において使用される言語(フランス語)
——言語の使用される範囲と国の領土が同じではないことを知る。

④ 複数言語が混在する国（中国）
——一つの言語がどこでも通用する日本は特殊な状況下にあることを知る。

⑤ 方言と共通語
——方言の果たす役割、中国の方言事情を知る。

⑥ 異文化を知る必要性（生活）
——異文化摩擦の具体例について検討する。

⑦ 異文化を知る必要性（ビジネス）
——異文化摩擦の具体例を知る。文化が組織のタイプにも反映されていることを知る。

⑧ 言葉に反映された文化
——文化が言葉にも反映されていることを学ぶ。

最初は外国の常識が日本のそれといかに異なるかについて、具体例を挙げながら紹介することから始める。外国の常識は、それらを知るだけでも十分に驚きであることを実感してもらう。異文化について興味をもって学んでいくための準備段階である。次に、外国語の音声を実際に聞いてもらう。日本において外国語と接するのは、学校での「英語」の時間であるのが通例であり、文字言語として接するのが一般的である。このため、複数の外国語の音を聞いてその音色を味わうことで、外国語を「勉強の対象」としてではなく、固有のメロディーをもった美しいものであることに気づくと同時に、それぞれの社会において日常使用されている身近な存在であることを認識してもらうことが必要となる。取り上げる外国語は、英語、フランス語、中国語、韓国(朝鮮)語の四つである。それぞれ独特の音声的特徴を有しており、いずれも大学における外国語科目としてポピュラーなものである。言語の美しさは文章朗読や会話などの形式でも味わうことができるが、歌の形によってとりわけ際立つため、ゆっくりしたスピードのシャンソン(フランス語)、唐詩(中国語)なども聞く。このステップは、その後に展開する異文化との出会いの様々な事例を、自分たちと同様に毎日生活している生身の人間の生活風景としてとらえてもらうことをねらいとしている。さらに、これらの言語が使用されている状況について概観する。具体的には、フランス語や中国語の使用状況を日本語のそれと比較する。日本のように特定の民族が大多数を占め、周りを海で囲まれて他民族との交流が比較的限定されている国においては、日本語という一つの言語を使用して生活することが可能である。しかし、このような状況は世界的に見ると必ずしも当たり前のことではなく、英語やフランス語のように複数の国にまたがって使用されている言語があったり、中国のように複数の言語が一つの国において使用されていたりする状況がある。むしろ、日本語のように国の輪郭と言語の使用地域の輪郭がほぼ一致するという事例は特別であることを認識する必要がある。国によっては、異文化との接触はきわめて身近な出来事であり、それらと向き合うことは生きていく上で不可避である。また、異文化は、外国などで異民族と接する場合に体験するものとは限らず、同一民族の地域性の相違としてそれらと出会うこともある。地域が異なれば言葉(方言)も異なる。方言の相違は、地域による人々の気質の相違と表裏一体で

ある。

「異文化」とは、価値観、考え方、行動原理の異なる者の間において認められるものであり、当事者が接触する過程において衝突・妥協を繰り返しながらよりよい関係を築いていくことが求められる。コミュニティが形成される過程においては、相手と自分との相違を知り、理解した上でのぞむことが要求されることは言うまでもない。異文化についての知識はコミュニティづくりの過程において不可欠なものであり、社会生活を営む上でこれからもますます重要なものとなっていくであろう。

1. 異文化を学ぶことの面白さ・意義

異文化に関心をもってもらうため、①では外国の様々な興味深い事例を紹介する。これらの中には、ものの見方・価値観が言葉にあらわれているものや、時間に関する考え方、特定の行為が人に対してどのようなメッセージを送るかなど、現地に行けばいやでも遭遇するいくつかの事例が含まれている。この種の事例を多く知ることにより、外国を訪れた際に出会う可能性のある戸惑いや不安、誤解や摩擦などを避けることができ、ひいては生活やビジネスを円滑にすすめることができよう。以下に使用テキストおよびその内容を紹介する。

資料 1：荻野洋一 1997『ニッポン人が面くらう世界の常識・非常識』, 河出書房新社。

例 1：「あの人は冷たい人だ」はタミル語ではほめ言葉となる(同：48-51)

日本語の「あの人は冷たい人だ」は人に対するマイナス評価を表わすが、インドの公用語の一つであるタミル語に直訳するとほめ言葉となる。タミル語はインド、スリランカ、マレーシアなどで使用されている言語であり、これらの地域は年間を通して暑い[1]。このような気候条件が言語に反映されたためか、「冷たい」は「気持ちがいい」、「心地よい」に通じている。

例１のような比喩表現は、直訳すると上記のように日本語とはまったく異なる内容を表わすことがしばしばであり、言語が使用される地域の環境や生活と密接に関わっている。語の意味の総和として訳を試みるとうまくいかないどころか、誤解が生じてトラブルの原因ともなりかねない。

例２：イタリアでは駅の時計が５分進み、列車内の時計は２～３分遅れていた(同：21-23)

日本人の常識では「約束の時間を守るのはあたりまえ」であり、公共施設に設置されている時計はもちろんのこと、各自の腕時計の時刻も正確に合わせておこうとする。イタリアを旅行したある日本人は、鉄道の駅の時計が五分も進んでいるのを見た。その人が後で知ったのは、乗客の足を急がせ乗り遅れを防ごうとするために、駅の時計を意図的に５分進ませておくということであった。これとは反対に、列車内の時計は２～３分遅らせる場合が多い。定刻どおりに発車できない場合でも乗客に心配をかけないためである。

例 3：チリでは人前で靴を脱ぐと大目玉を食らう(同：132-135)

チリで列車に乗った日本人が、日本でいつもそうするように履いていた靴を脱ぎ、靴下も脱いで足を投げ出していたところ、車掌がやってきて怒鳴り始めた。スペイン語の説明は理解で

きなかったが、やがて事情が飲み込めた。人前で靴を脱いでいるのがいけなかったのである。地元の乗客が車掌に苦情を告げたらしい。行儀が悪い以上の許されない行為とされたのである。

資料2：ラジオ日本『外人さん大指摘！爆笑日本人の急所』制作スタッフ編 2005『日本人がはじめて聞いた私の国の超～常識!!』，青春出版社。

例4：グリコの「Pocky」はマレーシアでは「Rocky」の名で売られている(同：95-96)

イスラム国家であるマレーシアでは豚は忌み嫌われており、「porky(豚のような)」を連想させる「Pocky」は商品名としてふさわしくないため、「Rocky」に改めて販売されている[2)]。

資料3：21世紀研究会編2001『常識の世界地図』，文春新書。

例5：人に足の裏を見せるのは侮辱である(同：57-58)

北アフリカ、アラブなどのイスラム圏で「(足の裏が見えるような形で)足を組む」動作をするのはよくない。マナー違反どころか失礼となる。イスラム圏では、相手に自分の足の裏を見せることは相手への侮辱とされている。ちなみにヨーロッパでは、たとえ靴をはいていても足の裏を見せるのはよくないと考えられている点でアメリカとは異なる。

例6：靴を脱ぐことの意味(同：60-63)

イタリア旅行中の日本人女性が列車で移動中、靴を脱いで前の座席に足をかけて座っていたところ、近くにいた男性から「いくらなんだい？」と聞かれた。アメリカ留学中の日本人女性が知り合いになった男性の家に遊びに行き、いつもの癖でじゅうたんの上で靴を脱いだところ押し倒された。裁判に訴えたが、陪審員の判断は「男性の家に行って靴まで脱いだのでは合意の上ととられても仕方がない」であり、男性は無罪となった。

日本人はずっと靴を履いたままでいることに抵抗感や疲労感を覚える。欧米人は日本の家屋に入る時、玄関で靴を脱がされることに抵抗感を覚えるようだ[3)]。

例7：割り勘について(同：139-142)

韓国では何人かで食事に行くと、その中の年長者もしくは懐具体のいい人が勘定をはらう。食事会や飲み会では、誘った人が全員の分を支払う。「割り勘」はしない。目上の者や優位の者が他人をもてなすことが美徳であるという意識が根底にあるらしい[4)]。

例8：時間に遅れていくのが礼儀(同：182-184)

人の家に招かれたら、日本人は時間よりやや遅れていく。イギリスやフランス、アメリカでもこれは通用する。ドイツ、スイス、ベルギー、北欧では時間厳守らしい。ラテン・アメリカでは最低でも20～30分遅れていくのが常識とされている。時間に対する感覚の相違が日本とは異なる点で例2と共通している。

例9：大リーグのルールブックにはないルール(同：160-163)

アメリカ人にとって野球のプレーは、開拓時代の銃をバットに持ち替えただけで、決闘の精神そのものでのぞむものであると考えられている。このため、瀕死の相手に追い討ちをかけることは、ルールには違反しないが卑怯な行為と

みなされる。例えば、味方チームが大量リードしている時に盗塁すると、盗塁のやり方によっては味方からも非難されたり、意図的とも取れる死球を受けたりする。大リーグの常識では、ホームランを打った後に歯を見せて(笑顔で)走ったりガッツ・ポーズをとることは、相手投手への侮辱となるのでやってはいけない。味方を見捨ててはならないという考えから、乱闘が起こった際には参加しなくてはならない。

資料 4：鈴木孝夫 1990『日本語と外国語』，岩波新書。

例 10：orange はオレンジとは限らない（同：8-17）

著者の鈴木氏が米国コネチカット州ニュー・ヘイヴンのホテルで車を頼んだ。10 分ほどでオレンジ色の小型車が迎えに行くからホテルの入り口で待っていてくれとの返事であった。20 分たってもオレンジ色の車は現れない。はっとして、少し前から止まっている茶色の車に気づき、近寄ってみるとそれが頼んだ車だった。「オレンジ色の車が来ると言われていたのでわからなかった」というと、運転手は平然と「この車は orange だよ」と答えた。日本語では「茶色」で表わされる色も英語の“orange”の範囲に含まれているらしい。

例 11：「リンゴの色」（同：28-37）

日本人にとって「リンゴ」は「赤」をイメージするものである。黄色や緑のリンゴもあるが、一般的には「リンゴは赤」とされている。フランスでは「リンゴは緑」と決まっている。フランスにも赤や黄色のリンゴがあるが、リンゴのイメージは緑である[5]。

例 12：「アラブ人と太陽」（同：47-49）

日本の大手食品会社があるアラブの国に缶詰を輸出した。商品の内容と価格に自信をもって輸出したが、売れ行きがよくない。調査員を派遣して、自社製品と他社製品とを混ぜて目隠しテストを行なってみると、自社製品の評判はよかった。調査員はあるマーケットに入り、他社製品を買っている現地の人に尋ねてみると、「太陽の印がついているから」とのこと。日本ではよく使われる太陽や旭、日の丸は、年中灼熱の太陽で苦しめられている砂漠の人々にとっては忌み嫌う対象でしかない。反対に、月は人々にとって涼しさ、安らぎを与えてくれる存在となる。イスラム教を信仰する国々の国旗には、三日月が取り入れられている[6]。

例 13：「蝶と蛾」（同：49-55）

フランス語では「蝶」と「蛾」の区別がなく、いずれも“papillon”である。『ラルース百科事典』の“papillon”の項には、様々な蝶と蛾の写真が雑然と混ざり合っている。仏和辞典には、蝶は“papillon”、蛾は“papillon de nuit(夜の蝶)”と出ているが、後者は紛らわしいときに限って使われる表現である。ドイツ語も「蝶」、「蛾」を“schmetterling”という語で表わす。日本語では区別されるものが区別されない例としてはさらに、英語の“water”、フランス語の“eau”がある。いずれも「湯」、「水」双方の意味を含んだ語である。

例 14：「足は恥部の一つ」（同：115-121）

日本人にとって靴とは単なる履物にすぎない。家の中や乗り物の中など、靴が必要ない場所では脱ぐことを当然であると考えている。日本は湿気の多い気候であるため、蒸れないようにゆるめの靴を履く。公共の施設ではスリッパに履

き替える。イギリス人は足にきっちり合った靴を履き、一日中脱がないで過ごす。このため、年をとると足の骨の変形からくる病気を患う人が多く、“podiatrist(足病医)”という専門医が繁盛する。イギリス人にとって、素足は他人に見せてはいけない身体部位である。素足は寝室でだけ許される。人前で靴を脱ぐことは寝室での行為を連想させるほどの強烈な印象を他人に与える。日本に来たイギリス人は日本人の家に上がる時、靴を脱ぐことに強いためらいと抵抗感を示す。

以上のような事例を紹介することによって、外国の習慣や常識が日本のそれといかに異なるかを知り、外国人と接触する場合には自分たちがいままで身につけてきた日本の常識が通用しないということを意識するきっかけとしてもらう。資料には、個別の例について「なぜそうなのか」が説明されているもの、されていないものがある。大切なことは、「日本人と外国人は異なる」のであり、「異なっていることを知った上でつき合う必要がある」ということである。そして、「なぜ？」について受講生と一緒に考えるのである。例えば、「人前で靴を脱ぐことに抵抗がない」という日本人の意識が、日本のような温暖湿潤な気候や、それに影響された家屋のつくりとも深く関わっていることは容易に想像できよう。このような考察を受講生との間で行なっていく。異文化について「なぜそうなのか？」と考える習慣をもつことにより、外国人と接触する際に、相手の行為や考え方を自分の側のそれと比較してマイナス評価してしまうのではなく、冷静に相手との接点、妥協点を探ろうとする姿勢が養われよう。

2. 外国語の面白さ・音の魅力

どんな言語の音声にも独特のメロディーがあり、意味は理解できなくてもその言語であると特定できる特徴を備えている。ある言語の音声を美しいと感じるかどうかは言うまでも主観的なものであるが、中国語とフランス語はとりわけ美しいといわれている[7]。中国語の音節には「声調」とよばれる高低アクセントがあり、中国語の音声を美しいと感じさせる一因であるといわれる。また、町田1999：169-170は、フランス語には「アン」、「オン」のように聞こえる音、すなわち発音の際に空気が鼻にぬける「鼻母音」や、発音の際に空気の流れがほとんど妨げられることのない、すなわち母音に近い「流音(“l”、“r”がこれにあたる)」が存在することによってフランス語の発音にやわらかさが感じられ、ひいては美しいと感じられる要因となっているのではないかと推測している。

演習では、言語を、それが使用されている社会におけるごくあたりまえの身近な存在として感じてもらうため、4つの言語の音声を実際に耳で聞く時間をもうけた。使用する言語材料は、言語音声の美しい面があらわれやすい歌や詩をはじめ、短い会話表現や文章である。具体的には以下のようなものを用いる。

資料5：① 歌・詩

フランス語－エディット・ピアフ「愛の賛歌」，大野修平／野村二郎編著『シャンソンで覚えるフランス語-1』，第三書房。

中国語－李白「早発白帝城」，許勢常安編著・吟誦1983『中国音による漢詩鑑賞』，心交社。

資料6：② 会話・文章

英語・フランス語ー藤田裕二／清藤多加子『英語もフランス語も』，評論社。

中国語ー三潴正道／陳祖蓓 2001『2001年度版 時事中国語の教科書 走出去吧』，朝日出版社。

韓国語ー『ＮＨＫラジオ アンニョンハシムニカ？ハングル講座』2005年１～３月号。

著名なシャンソンの曲である「愛の賛歌」については、原曲の内容が日本語で歌われる場合とは全く異なるものであることを紹介し、外国のヒット曲の歌詞内容が必ずしも原曲どおりとは限らないことを知ってもらう[8]。また、唐詩の資料としては、漢文の学習によってすでになじみのある李白の「早発白帝城」を使用し、現代語音によるものではあるが韻文としての唐詩を味わってもらう。会話表現では、同一内容の会話表現を英語とフランス語を交互に学ぶテキスト『英語もフランス語も』の本文朗読テープを聴くことにより、フランス語の音声が英語に比べて柔らかく感じられるか、美しいと感じられるかについての感想を述べてもらう。中国語の資料には『2001年度版 時事中国語の教科書 走出去吧』を使用する。同書の各課のテーマには、年々ひどくなる砂嵐(第３課)や絶滅に瀕している華南トラ(第８課)のような環境問題をはじめ、学部教育のメインテーマとなり得る内容が盛り込まれている。韓国語のテキストとしては『ＮＨＫラジオ アンニョンハシムニカ？ハングル講座』を使用する。使い捨て用品のない韓国のホテル事情、スーパーでのビニール袋が有料であること、辛いキムチチゲを食べたときに「涼しい」と表現する韓国語の発想、家畜や資源保護の観点から食堂に備え付けの楊枝がプラスチックや木ではなくジャガイモの澱粉で作られている、のような韓国事情を知ることのできる内容の会話表現である。中国語・韓国語の資料としては、音声を聞くための原文資料のほか、中国事情・韓国事情を知るために日本語訳を同時に配布する。

3. 複数の国において使用される言語――フランス語

複数の国にまたがって使用されている言語の代表としては英語が挙げられるが、フランス語もまた世界の多くの国々で使用されている言語である。『英語もフランス語も』：10-14 には、以下のようなフランス語の現在の使用上状況が紹介されている。

フランス語を母語として話す人口の多さは、世界の言語の中では第10位(2002年度)である。公用語としている国は 30 カ国以上。英語、スペイン語とならび国際社会において重要な役割を果たしている。フランス語を日常的に使用している国(froncophonie)としてはフランスやベルギー、スイスなどヨーロッパの国々のほか、カナダ(人口の 27%)、西アフリカを中心とする旧フランス領が挙げられる。

フランス語が今日のように広く使用されているのは、主としてフランス人の移住(カナダ)や植民地を獲得したこと(アフリカ)のような歴史的要因によるところが大きい。英語やフランス語に限らず、ある言語が使用されている地域の境界と国境は一致しないことが多い。日本語の

ように、国の領土、民族の居住範囲、言語の使用範囲の3者間に大きなズレのないケースは世界的にみてもそう多くはなく、むしろ特別である。

4. 複数言語が混在する国——中国

一つの国に複数の民族・言語が混在するケースもまた多い。このような例として『英語もフランス語も』: 11、14は、フランスをはじめとするフランス語圏の事情を以下のように紹介している。

フランスにおいては、フランス語のほか、ブルターニュ語、アルザス語、コルシカ語、バスク語、カタロニア語などの地方語が使用されている。また、ベルギーにおいてはフランス語のほかにフラマン語、ドイツ語が公用語とされ、スイスにおいてはフランス語、ドイツ語が公用語とされている。さらにカナダの場合、人口の27%を占めるフランス語話者の80%がケベック州に住んでいるが、ケベック州には言語意識からくる独立運動さえ存在する。モロッコやアルジェリア、チュニジアでは、フランス語とアラビア語が併用されている。従ってフランス語圏の文化は多種多様であり、学ぶ際には、英語と同様に「国際語」としてのフランス語という視点が重要である。

カナダにおけるフランス語圏であるケベック州の歴史については、『NHKラジオ フランス語講座』2003年5月号(応用編第9課)にケベック州を紹介した文章が掲載されている。西からインドへの道を求めたフランス人が1534年にケベックを発見し、1600年から定住をはじめ、1760年にイギリス領となって本国との関係が絶たれた後も自らの伝統と言語を守り抜いたケベック人の歴史について述べられた簡潔な文章に目を通すことによって、フランス語がフランス以外の国においても使用されるにいたった歴史と現実を学ぶ。

ところで、一つの国に多くの民族、言語が存在する国として代表的なものは、中国である。中国は典型的な多民族国家であり、人口の97%弱を占める「漢民族」のほかに55の少数民族が住んでいる。少数民族の中にはチベット族や朝鮮族のように独自の言語をもつものもあれば、回族のようにもたないものもある。このような環境においては、他民族との接触は生活の中におけるごく普通の出来事であり、他民族を理解し接点を見出すという作業は、社会生活を営む上で必要なことである。言語の面においても、一人の人間が一つの言語を使用して生活するとは限らない。例えば少数民族の場合、祖父母は民族言語、両親は民族言語と「漢語(いわゆる中国語)」、子どもは漢語を使用するというケースがみられる。代を重ねるごとに漢化されていくわけであるが、この過程はいわゆる文化的融合の過程であるといえよう。「中国文化」は、長い歴史の過程で様々な異文化を取り入れた結果できあがったものである[9)]。

言語の使用状況が歴史の産物である具体例を理解するための資料としては、「ぼく、おじいちゃんと話したい」を使用した。台湾中部の「ブヌン族」の家庭を子どもの目線から物語風に紹介した資料である。この家庭では祖父は三つの名をもっている。「トーパス・タナピマ(ブヌン語名)」、「田中武夫(日本語名)」、「田文統(中国名)」である。両親、子どもはそれぞれブヌン語名と中国語名をもっている。祖父が日本語名をもっているのは、台湾がかつて日本の植民地であった頃に日本語使用が義務づけられていたためであり、中国語名をもっているのは第二次世界大

戦後に中国本土から国民党が入ってきて「北京語」の使用が義務づけられたためである[10]。祖父は日本語が上手で北京語が苦手である。主人公の「ぼく」は学校で北京語を学んでいるが、ブヌン語が苦手であり祖父とはあまり話が通じない。日本語は聞いたこともない。ある日「ぼく」の住む村に日本人の客がやってきて祖父が日本語で話をするのを聞き、さびしくなった。「ぼく、おじいちゃんと話したい」は、以上のようなストーリーで、多言語使用の実態を客観的なデータではなく、当事者の生活風景として描き出している。

5. 方言と共通語

④では多民族国家としての中国を取り上げたが、中国の人口の9割以上を占める漢民族が話す漢語も地域によって様々な方言に分かれており、それらは地域の気質の相違と表裏一体である。中国における方言と共通語の話に入る前に、方言の役割とは何かについて考える時間をもうけた。使用するのは司馬遼太郎 1990『手掘り日本史』，文春文庫。同：37-41 には、方言のもつ役割と魅力についての司馬氏の見解が述べられている。

私は大阪弁という、方言地帯に住んでいます。方言生活者です。方言のよさというのは、根から生えた自然のことばだということです。その点で、人間の感情をあらわすのに都合が大変よろしい。そのかわり方言では学問を著述することはできません。また物事を論理的に考えていくこともできない。こういう面での用を足すために私たち日本人は標準語をあわせ持っています。ちゃんとした筋道を通さねばならないときは標準語。生活は方言。そういうつかいわけをしながら、私のような地方居住者はくらしている。

渋谷天外さんの松竹新喜劇が東京の明治座でも当たるのは、彼らの努力や才能によることはもちろんでしょうが、多分に方言のリアリティによるものでしょう。方言は、生きた言葉ですから、人間の情念を表現しやすい。

――中略――

私は、事務的な事柄については、他の大阪の人とおなじように、関西なまりの標準語を使っていますが、不自由ですよね。たとえば「そうなんです」と言えば、相手は当然ながら、「いや、違いますよ」と言ってきます。対決になってしまう。しかし、「そうだんがな」と言ったら、別に対決にならない。ならないが、こっちの立場はテコで動かないといった雰囲気が出るでしょう。方言のもっている摩訶不思議な実在感とでもいうものでしょう。論理的説得力ではなくて、人間的、風土的な説得力なんです。

上記資料によって、方言のもつ働きを理解してもらう。それによって地域による方言の相違、気質の相違についての理解を深める準備とする。

地域による方言間の相違が大きい例としてしばしば話題にのぼるのが中国語である。中国の方言は大きく7つに分けられ[11]、その相違は発音面において最も大きいとされている。異なる方言使用者の間ではコミュニケーションそのものが成立しないこともある。このため、同じく中国人といっても、中国のどこ出身の人であるかによって気質が異なるのは容易に推測がつく。地域による気質の相違についての資料としては、孔健 1994 を使用する。同：131-141 に挙げられている各地の気質についての記述を以下に挙げる。

東北人：“東北”とは東北三省(黒竜江、吉林、遼寧)をさす。酒好きで性格は明るい。東北人とビジネスをすすめるには、まず友人になってしまうことが先決であり、ビジネス交渉はそれからとなる。義侠心が強く、友人のためなら自分を犠牲にする。

北京人：王都の人間としての誇りをもち、特に上海人に対しては、「北京こそが政治・経済・文化の中心地だ」という気持ちが強い。礼儀正しい。権力指向が強い。北京人とビジネスをする場合、上部とのネットワークがなければ話がスムーズに進展しない傾向がある。

上海人：計算高い。外国に対する好奇心が強く、外国から何でもいち早く受け入れようとする気風をもつ。北方の人とは気質が大きく異なるため、結婚は難しい。

同資料ではさらに、福建人、広東人、香港人などについてのコメントが続く。このような地方ごとの気質の相違を知っておくことは、中国人相手にビジネスをする際に極めて大切である。

地域による気質の相違は当然ながら日本においても存在し、いわゆる「県民性」の相違として問題にされることが多い。日本における県民性の相違について述べた資料としては、ハイパープレス2003、武光2001を使用する。地元愛知県の項にはそれぞれ以下のような内容が挙げられている。

ハイパープレス2003：124-128

愛知県人：義理人情などの人間関係のしがらみに左右されることなく、ショッピングでもビジネスでも「お値打ち」を追求する。堅実で合理性を追求する。これは尾張藩が勤倹貯蓄を奨励してからの伝統である。倹約好きな反面、他人への見栄も強く、家柄や格式を重んじる。このことは冠婚葬祭にあらわれている。地元のものを好む傾向があり、自県の文化を守り続ける。クレジットカードやローンを好まない。

武光誠2001：125-126

愛知県民：柔軟性に富む面と保守的な面とをともにもちあわせており、それを状況によって使い分けているようだ。このような気質を最も強くもつのが名古屋人であり、合理主義で倹約を重んじ、義理人情より先に損得を考える。流行を追わず、秩序を重んじる。

このような記述が個別のケースについてどこまで正確にあてはまるかは別として、「県民性」なるものが存在することについては一般に広く認められている。地理的環境の相違によって文化が異なるのはごく普通に見られる現象であるが、どのような相違が存在するかについては、通常の社会生活において強く意識することはそれほど多くはないであろう。しかし、地域による気質の相違は、愛知県民について述べた上記の資料によっても明らかなように、ビジネスにも深く影響を及ぼすものである。出張や引越しで他県に移動した場合には、その土地の人々の気質について知っておくことが、地元の人々とビジネスをすすめる上で極めて重要となる。

6. 異文化を知る必要性—生活

この回では、日常生活における異文化体験の具体例を個別に見ていく。使用するのは主として大学用の英語テキストおよび教授用資料(本

文の試訳)である。

資料 7：マーク・ジュエル編著 2001『異文化へのパスポート』, 朝日出版社(第 8 課)。

例 15：日本の語学ホームスティからオーストラリアに帰ったきたブライアンは、プログラムの主催者に評価報告書を書く。ホストファミリーは親切で、彼はうまく順応し、ホームスティは成功であると思っている。しかし、主催者との面接で彼は驚く。ホストファミリーが来年度はプログラムに参加したくないと言っていることを知らされたのである。

この事例について、同資料は以下のような解説を加えている。

ブライアンが日本を訪れたのは夏であったが、ホストファミリーが提供した部屋にはエアコンがなかったため、彼は一日三回シャワーを浴びていた。ホストファミリーは水道代を心配し、ブライアンの洋服の洗濯や浴室掃除も大変であった。また、ブライアンがクラスメートと部屋でパーティーを開こうとした時、ホストファミリーは婉曲に断ったが、そのことは相手には伝わらずパーティーは開かれた。ブライアンが学校で知り合ったガールフレンドを家に連れてくることもしばしばであった。夜の九時前にはガールフレンドを帰宅させていたが、ホストファミリーは子どもに悪い影響を与えたと思った。しかし、この種の問題は異文化間コミュニケーションの過程において必ず起こりえるものであり、正しい準備をしておけば対処はそれほど難しくない。

上記の例では、ホストファミリーがブライアンの行為に対して、「困っている」ことを言葉で明確に伝えていなかった可能性がある。パーティーを開いてもよいかについてホストファミリーは「それは困るのでやめてほしい」と伝えたつもりだが、ブライアンには伝わっていない。両者の間でどのようなやりとりがあったかについて資料では言及していないので推測するしかないが、おそらく相手が日本人であれば察してくれるような遠まわしの言い方でブライアンに伝えたと思われる。コミュニケーションの際にどこまで言葉に出して相手に伝えるかの相違がこのような行き違いを生んだのであろう。資料７によれば、異文化間コミュニケーションに際しては当事者が双方の文化の違いを理解すると同時に、相手の文化に敬意を払い、直面した時には受け入れることが大切であり、このようなことができる人は異文化間適性があると言え、文化的な対立にうまく対処できるだけでなく、文化的に異なる人々から多くの価値観を学べる素養があるとしている。

資料 8：『ＮＨＫラジオ 英会話レッツスピーク』2005 年８月号：41、55

例 16：スティーブは、フィアンセである洋子の実家に挨拶に行くこととなった。食事のときに箸を上手に使うことで洋子の両親に対する印象をよくしたいスティーブは、箸の使い方を一生懸命に練習していく。当日洋子の両親や親戚と共に夕食をご馳走になっている時、洋子のお母さんが箸で取ってくれた料理をスティーブは直接に自分の箸でとって(自分の)皿に置いた。洋子のお父さんは驚いて口をぽかんと開けていた。

資料 9：ジョン・ギャスライト氏の講演「子どもは未来の宝もの～人と自然に優しい心をはぐくむコミュニティ～」[12)]

例17：ギャスライト氏が日本で始めてアパート暮らしをはじめた時のこと。かつて住んでいたカナダでは、新しく引っ越して来た人の家に近所の人々が挨拶に来る。挨拶がてらバスケットにいろいろな物を入れてプレゼントしてくれる（“welcome basket”とよばれる）。アパート暮らしを始めた同氏はそれを待っていたが誰も来ない。「僕は嫌われているのだろうか？」と悩んで大家さんに聞いたみたところ、「日本では引っ越した人が近所に挨拶に行く」とのこと。石鹸などをもって挨拶回りをし、無事に近所の人々との付き合いが始まった。

例16でスティーブのした行為はいわゆる「二人箸」とよばれ、「骨揚げ」の動作と同じであるため食事の場合にはタブーとされる。例16、例17のような類のケースは、一度経験すれば繰り返される可能性は少ない。

7. 異文化を知る必要性——ビジネス

この国では、異文化理解がビジネスにおいても必要であることを学ぶ。

資料7：マーク・ジュエル編著『異文化へのパスポート』，朝日出版社（第6課）。

例18：ビルはアラブ人のハッサンとのビジネス交渉はうまくいっていると考えている。最後の主要な点で合意に達した直後、ビルは椅子にゆったりと座って足を組んだ。彼のむこうに座っているハッサンは突然立ち上がり、部屋の反対側に歩いていく。ビルにはなぜハッサンの態度が急に変わったのかが理解できない。

例5で挙げたように、アラブ世界では相手に自分の足の裏を見せるのは侮辱である。「足を組む」というビルの動作は、結果的にハッサンに対して言葉によらない負のメッセージを送ったことになる。著者は、言葉を用いないコミュニケーションは言葉を使ったそれよりも先に起こるのが普通であり、人は言葉を用いないコミュニケーションの方を信頼しがちであるとしている。例18の場合、ビジネスがうまくいきそうであるにもかかわらず、ビルの何気ない動作によってご破算となる可能性が高い。

文化の相違は、上記のような個人間のコミュニケーションのほか、組織の運用面においても存在する。このような例が記載されている資料として、石井敏ほか編 1997 を使用する。同：170-174 には、多様な文化的背景をもった人々をまとめ、共通の目的に向かって組織を運営する「異文化経営」が取り上げられている。それによれば、日本人は同じ職場で同僚と仕事を分かちあい協力関係を築くので、各成員は仕事の流れや全体の状況から自分が今何をしなければならないかを察知している。このため、上司は部下に対していちいち細かなことを指示しなくても、「よく注意してやりなさい」、「何か肝心なことを忘れてはいないか」という表現を使えばよい。欧米や中国の工場では、従業員の仕事の範囲を細かく規定し、部下に指示を出す時も、「このねじをドライバーで右に5回以上締めて」、「明日の午後2時までにA社への見積書を作成しなさい」のように具体的かつ正確に言葉で表現する。

日本企業が外国で現地の人々を雇用する場合や、日本において外国人労働者を雇用する場合にはこの種の問題がつきものであろう。指示内容を正しく相手に理解させるためのテクニックが不可欠である。

生産された製品にも文化が反映されるケース

がある。２で挙げた例４は日本製品を外国で売るために現地の価値観に配慮したケースである。一方、以下の例では製品そのものに文化が反映されている。

資料 6：『ＮＨＫラジオ アンニョンハシムニカ？ハングル講座』2005 年２月：90

例 19：韓国の全自動洗濯機には、「煮る」というコースのある商品がたくさん出ている。タオルや下着、ふとんのカバー等は洗剤を入れて先に煮てから洗うという習慣があるため、このようになっている。汚れがよく落ちて消毒にもなるし、漂白剤を使わないので、環境の汚染を防ぐ効果もある。

同様の例としては、日清食品のカップヌードルがアメリカでは日本のものよりも短くカットして生産、販売されていることが挙げられる[13]。おそらくは食べる時にあまり音をたてないですむことも一つの理由となっていると推測される。日本ではそばやうどんのような麺類は音を立てて食べることが許される。特に、禅宗の考え方では、麺類を食べる際に音をたてるのは、「こんなにおいしいものをいただいております」という感謝の意味が込められているとされる。文化ごとに異なる習慣から異なる製品が生み出されることは自然な現象であるが、自分たちの身の回りを見わたしてそのことに気づくことは少ないように思われる。日本のことは日本人である自分たち自身が最もよく理解していると思い込んでいるが、実はそうとは限らない。外国文化のフィルターを通した上記のような製品の例を多く知ることは、ビジネスをすすめていく上で極めて有用である。自社製品が外国で売れるためには、その形状や働き、商標やネーミングにいたるまで、現地の価値観に照らして受け入れ可能なものであることが要求される。

8. 言葉に反映された文化

最終回は「ことばと社会」をテーマとし、社会の価値観やものの見方を反映している点に焦点をあて、「異文化理解の手段としての言葉」を取り上げる。使用する資料は、成戸 2002「ことばと社会」である。

言葉はそれが使用される社会の歴史や人々が置かれている自然環境とも密接に関わっている。例えば、英語の「牛」を表わす語には、“bull(去勢されていない雄牛)”、“ox(去勢された労役用の雄牛)”、“cow(雌牛)”、“calf(子牛)” があり、これは祖先が遊牧民であったことと深く関わっている。一方、例１で挙げたタミル語の「冷たい」に対しては、自然環境と深く関わったプラスの価値判断がなされている。日本語の「湯水のように使う」は、「金銭を惜しげもなくむやみに費やす」ことを表わし、日本のように水が豊富な環境においてはじめて成立する表現である。

異文化間交流の多くは言葉を通して行なわれるが、実際には言葉のみでは不十分なこともある。言葉は事実の一部しか伝えることができない。例えば、日本語の「てんぷら」は、「魚介類に小麦粉を水でといたころもをつけて油で揚げた料理」であるが、中国東北地方のある(本格的でない)日本料理店では、ジャガイモの千切りにころもをつけて油で揚げた料理が大量に出てきたことがある。一方、日本の「天丼」は「えび天丼」であり、少なくともエビのてんぷらが入っていなければならない。また、中国語の “狗” は「犬」を意味する語である。日本人が「犬」を話題にする時、食べることを前提としないのが通常である。中国では “狗” が食用とされる。日本人が食べ物である「豚肉、牛肉」として「豚、

牛」を話題にするように、中国語の“狗”には「食べ物」という情報が含まれているのである。さらに、中国語の“洗澡”は日本語の「風呂に入る」に対応する表現として教えられるが、実際には「風呂に入る、シャワーを浴びる、行水する、水浴する」の意味を包含している。従って、「“洗澡”は可能だが『風呂に入る』ことはできない」という状況があり得る。

このように言葉は、それが使用される社会の価値体系と一体となっており、言葉を真に理解するにはその背景である社会について知ることが要求される。言い換えれば、社会の価値体系が言葉に反映されているということである。いずれにせよ、外国語を学ぶことはその背景にある社会について知ることであり、その社会に属する人々とつき合っていくためにはいずれも欠かすことのできないものであると同時に、自分自身が属する社会を客観的にとらえなおすことにもつながる。

本ゼミの受講者が、異文化について興味をもち、外国語の学習に興味をもって取り組んでくれるとともに、ゼミで学んだ知識をよりよいコミュニティづくりに生かしてくれるようになれば幸いである。

注

1) 同：49によれば、インドのタミル・ナードゥ(タミル人の土地)では、一年の三つの季節を形容する際に、「暑い」、「より暑い」、「この上なく暑い」で表現する。
2) 「江崎グリコ」では、現地での印象をよくするため「Rocky」の名で販売している。よくあるニセモノではない。
3) 日本の家屋に入る際には履物を脱いで上がるため、「家に上がる」という表現が存在する。中国語では“进屋(家に入る)”という。
4) 韓国人と同様に中国人も「割り勘」をしない。
5) “vert pomme(リンゴ緑)”は日本語の「緑」よりも色が薄い色をさす(鈴木：29-30)。ちなみに「リンゴのような頬(des jues comme une pomme)」は頬の丸さを表わし、日本語のように頬の色が赤いことを表わしているのではない(同：33)。
6) 日中は暑いので、ピクニックなどの行楽にも日が沈んでから出かける。
7) 鐘ヶ江1964：14によれば、「西のフランス語、東の中国語」という言い方があり、西洋ではフランス語が、東洋では中国語がそれぞれ言葉の美しさを代表していることを表わす。
8) 「愛の賛歌」には、妻子ある男性(ボクサーのマルセル・セルダン)と恋に落ちたエディット・ピアフが、飛行機事故で亡くなったセルダンの訃報を聞いた日にニューヨークのクラブでセルダンのために歌っている途中で倒れこんだというエピソードがある。日本語の歌詞に比べるとはるかに激しい愛の力が感じられる歌である。
9) 『岩波 現代中国事典』によれば、「チャイナ・ドレス」はもともと満州族の長衣であったが、漢民族の女性がこれを受けいれ西洋ファッションの要素も取り入れてデザインに改良が加えられ、1930年代には都市部の女性に広く愛用されるようになった。
10) 台湾の北京語は、1949年に中華民国の国民党政府が台湾に移って以降広まった。
11) 中国の方言は、①北方方言、②呉方言、③湘(しょう)方言、④赣(かん)方言、⑤客家(はっか)方言、⑥粤(えつ)方言、⑦閩(びん)方言、に大別される。
12) ジョン・ギャスライト氏「子どもは未来の宝もの～人と自然に優しい心をはぐくむコミュニティ～」(2007.11.25／於ホテルキャッスルプラザ・名古屋／丸美コミュニティ主催)。「丸美コミュニティ」は名古屋市昭和区に本社をおく住宅販売会社「丸美産業」がマンションなどを購入した住民同士の地域を越えた交流をはかる組織。
13) 「日清食品」では、箸で食べる習慣がないアメリカでは食べやすいように短くしているとのこと。

参考文献（本文で書名を挙げたものを除く）

- 鐘ヶ江信光1964『中国語のすすめ』，講談社現代新書(1988)。
- 町田健1999『言語学が好きになる本』，研究社。
- 「ぼく、おじいちゃんと話したい」，財団法人アジア保健研修財団「アジアの子ども」編集委員会1994『アジアの子ども』，明石書店。
- 『岩波 現代中国事典』，岩波書店(1999)

・ 孔健 1994『日本人の発想 中国人の発想』，PHP 文庫。
・ 武光誠 2001『県民性の日本地図』，文春新書。
・ ハイパープレス 2003『「県民性」知られたくないホントの話』，青春文庫。
・ 石井敏ほか編 1997『異文化コミュニケーション・ハンドブック』，有斐閣選書。
・ 成戸浩嗣 2002「ことばと社会」，愛知学泉大学コミュニティ政策学部編『コミュニテイ政策を学ぶ』，愛知学泉大学出版会

（2007．11.26）